

## 第九十六 人の迷惑

大原の閉口は去る事ながら先に此家を去りし時田舎娘のお代に睨み付けられたるお登和嬢は氣味悪く思ひて我家へ歸りし後も心安からず、兄にも今の仔細を語り如何なる事にやと相談するに兄の中川は薄々大原の事情を知れり、「それは必ず大原君の従妹だらう、本家の娘を大原君に妻はせやうと郷里の方で其相談が出来て居たらしい、そこで大原君の兩親と其の本家の兩親と當人の娘とが急に出て來たのかも知れない、嗚大原君が困つて居るだらう、然し其事は小山君が承知して居て兩親が出て來たら小山君が血族結婚の弊害を説破する積りになつて居たが御當人の出て來たのには少々閉口だ、今に近が歸つたら委しい様子も分るだらう」と手傳に遣りたる下女の歸りを待ちぬ、意外の客にて臺所も急に片付かざりけん下女は遅くなりて漸く立ち戻りしが主人より問はるゝ迄も無く自分の方から大原家の有様を言告度くて溜まらず「お嬢様、マア大變で御座いますよ、あの團子つ鼻の娘さんは大原さんのお従妹なので、お郷里の方ではあの娘さんと大原さんとを婚禮させる様に大概話しが極まつて居た處へ大原さんがお嬢様の事を申してお進げなすつたものですから急に驚いて皆さんが出ておいでなすつたのです、大原さんも閉口なすつたの何のつて、臺所へいらしつては溜息計り吐いてホントにお可哀想ですよ、それにあの娘さんがモ一自分では大原さんの奥さん氣取りでお嬢様の事を何の彼のと云つて妬くのですもの、可笑しいやら憎らしいやら私も腸が立つて溜まりません、あの娘さんの大食には吃しましたよ、初めの内はヤレお汁が甘いのお豆腐が嚙れないのと惡口計り言つて居ましたが段々美味い御馳走が始めたら一つ残らずお皿の底まで綺麗に食べて了つてお負に椎茸の御飯を大きな茶碗で九杯お更りをしました、臺所でも皆んな膽を潰して居ます、大原さんが大食でいらつしやると思ひましたが何うして／＼、あの娘さんに比べたら半分にも追付きません、小山の奥さんが爾うお言ひでした、早く大阪へ連れて行つて博覽會の見世物に出したら宜からうつて、オホゝ、それは／＼可笑しう御座いました、あの娘さんが大口開いて食べる様子をお目に掛け度い位でした」と下女はまだ其時

の事を追想して獨りクスノ、笑つて居る、お登和嬢は笑ふどころの心にあらず「大原さんもお氣の毒だ子、それからお客様は何うなつたえ、皆さんが彼處へお泊りかえ」下女「イ、エそれも子夜被蒲團が足り無いの、寝る座敷が無いのと散々騒だ揚句大原さんの御両親だけ彼處へお泊りなすつて本家の御両親とあの娘さんの三人は向ふ横町の旅店へ行く事になりました、そのお世話は小山の奥さんがなすつて自分が歸りがけに三人を送り込で進げると只今皆さんで御一緒にいらつしやいました、ホントに大原さんこそお可哀想とお氣の毒とも何とも申し上げやうがありません、先刻なんぞは臺所の隅でポロリノ、涙を漏していらつしやいました、御自分は晩の御飯も召上らず、モ、何も食へ度くないと言ていらつしやいます、それに引かへてあの娘さんの獨りで威張ること、自分の家へでも來た様に臺所へまで出て來るのですもの」と下女はお代が目の敵、お登和嬢黙然と思案に沈みて何事も言はず、兄の中川自ら羽織を引かけ出で行かんとするにお登和俄に袖を惹き「兄さん、今頃から何方へ」中川「ちよいと小山君の處へ行つて相談して來る」お登和あながちに留めず「でも子大原さんの御迷惑にならない様に御相談なすつて下さい」と轉た人の身を哀れに思ふ、

## 第九十七 仲裁人

此夜中川と小山が如何なる相談をなしけむ、夜更て別たるが翌日小山は我業務を休て早朝より大原の家を訪へり、折りも大原は座敷に在りて我父と打沈みたる談話に耽り居たるが小山に訪はれしを百萬の援兵より力強く覺えて迎え入れ「阿父さんはれが今もお話申した親友の小山君です」と先づ我が父に紹介する、小山も初對面の口儀を述べたり、大原の父は今しも我子より委しき物語を聞きたる事とて初對面ながら他人らしき心地せず「毎度倅が色々お世話様になりますそうで、殊に今度此方へ家を持ちましたり又はお登和さんとやらの事でも一方ならぬ御盡力に預かりましたそうで、何ともハヤ難有う存じまう、それに就て私どもの方にも色々の事情がありまして昨日は心ならずも本家の人達と一緒に上京致しましたが昨晩は倅も大まごつきで、其節は又た貴君の奥様が臺所をお手傳ひ下さいまして誠に御厄介をかけました」

と父は物の解るだけ我子に對しても小山に對しても今度の事を氣の毒に思ふ、小山は其の様子の大原に同情あるを察して頼もしく、「イヤ私もお世話と云ふ程の事は出来ませんが學校以來兄弟の様に致して居る大原君の事ですから萬事打明けての御相談、お郷里の御様子も委しく伺つて居りました、昨日になつて火急の御上京は定めし御本家のお嬢さんを大原君と婚禮させやうとお思召でありませうが其事に就いては豫ねて大原君からも委しい手紙を差上げてある筈大概はお解りになつた事と存じます」父「ハイ爾う被仰られると誠に面目が御座いません、私は最初から其事に心の進みませんで倅の方へも近頃まで何とも申しません位でしたが何分にも本家の人達や當人が一生懸命になつて居りますし、滿の母も身内の事ではありますし、私一人が何と思ひましても養子の身分で申す事は通りませず、誠に困つて居りました、昨晚も終夜寝ないで倅と三人其事を相談致しましたが倅は何うしても急に承知しそもありません、母は是非とも承知させなければならんと云ふ意氣組、私は仲へ入つて誠にハヤ弱る計り、母は只今其事の相談に旅店の方へ参りましたが倅の申すには兎も角も小山さんにお目にかつて呉れ、爾うすれば此方の心も委しく分るからと實は貴君をお待ち申して居た位です、如何で御座いませう今度の事は、私も何うして宜いか始末に困ります」と餘程途方に暮れたる様子、小山は斯くあるべしと察して來りしなり、昨夜中川との會合に種々の材料を取蒐め、飽くまでも大原の為に辯護せんとして來りしなり「御老人其事は大原君の口から充分に貴老方へ申述べる事が出来ませんでせうから私が代つて委しく申上げる積りです、大原君も決して感情の上から本家のお嬢さんを嫌ふ譯でありません、道理の上から血族結婚と云ふ事に非常の大害があるので、従兄弟同士の婚姻は全く野蠻の遺風です、何は兎もあれ先づ此の報告書を讀んで御覽下さい、西洋の例や、古い事の證據ではありません、直ぐ眼前にある東京盲亞學校で近頃調査した確實の報告書です」と一枚の紙片を前に置ぬ、

## 第九十八 血族婚禮

論より證據は盲亞學校の失官原因、小山は一々其要點を指摘し「如何

です御老體、唾生生來の内殆ど二分一強は從兄弟又は再從兄弟結婚者の  
 の出産にしてと書いてありませう、生れつきの唾は半分以上從兄弟同  
 士や或は再從兄弟同士の夫婦の子だと申すのですよ、それから他の原  
 因に依つて失官する者の中にも從兄弟再從兄弟結婚者の出産者多しと  
 ありますのは生れつきで無い、途中から病氣で唾となるものも矢つ張  
 り爾う云ふ夫婦の子が多いとしてあります、生れつきのが半分以上で、  
 途中からのも矢つ張りその方が多いのですから殆ど唾の大部分は血族  
 結婚から出来るのです、之を反對に申せば今の世に血族結婚が無かつ  
 た聾や唾は殆ど僅にて減つて居るでせう、此に一々例が載せてありま  
 す、何卒よくお讀み下さい、第一例として從兄弟同士の夫婦から六人  
 の子が生まれました、其長女は病身で夭死、其次女が一人達者で無疵で、  
 三男が唾で、四番目の女は夭死で五番目の女は唾で、六番目の男も唾  
 で、三番目の男と六番目の男は兄弟共に本校生徒なりとしてあります、  
 して見ると六人の子供の内で満足なのは只一人です、ナント恐いもの  
 でありませんか、第二例も從兄弟同士の夫婦です、是れは長男が夭死、  
 次女が唾、三男と四男とが唾で共に本校生徒となりと、四人の子が一  
 人も満足で無いのです、第三例も從兄弟の夫婦で長女と二男三男と三  
 人の子が残らず唾で皆な本校生徒なりと、第四例が四人の子の内一人  
 が満足な計り三人は唾、第五例は七人の子の内三人は夭死、二人は  
 唾、満足なのは一人切りです、是れを御覽になつて何とお思召ますか、  
 御息さんとお姪子さんとを婚禮させて御當人同士に故障が無くつて  
 も生れる子が此通り孰れも不具であつたり或は夭死したり一人も役に  
 立たなかつたら跡で後悔なすつても追付きません、序にモ一 つ眼科  
 醫者の報告を御覽に入れます、色素網膜炎と云つて今の醫學上で治  
 療の出来ない難病があります、それも多くは血族結婚から來ると云ふ  
 ので、斯う書いてあります、余が先年或る病院で二年半に診察した眼  
 病患者中に二十四人の色素網膜炎があつた、其中の十人は血族夫婦の  
 子である、十人の内の九人は從兄弟同士の子で一人は再從兄弟の子で  
 あると、斯うして見ると從兄弟同士の子は生れながらの不具で無くつ  
 ても色々な病氣にか、つて到底満足した人間になれません、是れは手  
 近い我邦の例ですが西洋の例を調べれば證據は何程でもありません、支  
 那でも昔しから同姓を娶らずと云つて血族結婚を禁じたのは其弊害を  
 知つたからです、西洋では既に獨逸聯邦の如く國法を以て禁じてある

處もあります我邦でも追々禁じなければなりません、是れ程證據のある事を嚴禁しないのは文明が進まないのです、我々文學者は社會を文明に導くべき天職を持つて居ます、外の人が從兄弟同士で婚禮しやうと云ふ場合には何處までも其弊害を説いて中止させなければならん身の上です、その大原君が何うして自ら從兄弟と結婚が出来ませう、それをお考へになつたら到底今度の事を御決行なさる事は出来ませうまい」と獨り親友の為のみにあらず、社會の為めにも道理を基として熱心に説く所あり、大原の父今更の様に茫然として幾度か其報告書を讀み下し、「成程斯うして見ると氣味の悪いものですな」

## 第九十九 證據物

如何に親の權を以てするも斯くまで利害分明なる血族結婚を我子に向つて強ゐ難し、大原の父は深く肝に銘じたる様子にて、「小山さん、斯う伺つて見れば何うしても從兄弟同士の婚禮をさせる譯に参りません、此事は飽くまでも私が強情を張つて倅の難儀を救ひませう、何卒暫く此の書類を私にお貸しなすつて下さい、是れから一つ旅店へ参つて本家の人達に此の證據を見せて遣りませう」と今は漸く決心を固めしに似たり、小山は心強く、「何卒爾うなすつて下さい、然し御老人、それをお見せになつても御本家の人達が何處の從兄弟同士の夫婦がある其子は皆んな満足だと反對の證據を挙げてお打消しなさるに違ひありません、それは丁度人に養生をしると勧めるのに、イヤ誰は不養生をして七十迄生きたから養生するに及ばんと云ふ様なもので、一二の特例で全體の道理を打消すのですからよく其事を被仰らないと中々先方に解りませんよ、何うかよく皆さんがお了解になつて快く今度の一件を御中止下さると宜いが、如何でせう、貴老がそれをお見せなすつたら皆さんが直ぐに御承知なさるでせうか」父「イヤそれは逆も六か敷う御座いませう、然し明日にも婚禮を濟ませると騒いで居ますから兎も角も私が此の證據を見せて一日でも二日でも婚禮の事を先へ延ばす様に致しませう、其内には何か好い工風が出るかも知れませんが、何にしろ向ふでは今直ぐと申すのですから延ばせるだけ延ばさなくつてはなりません」と借りたる書類を携へ旅店へ出で行きたり、跡に小山は打

萎れたる大原を顧み「大原君、飛んだ究命だネ、昨日は少々弱つたらう」大原「少々どころか、停車場であの娘に飛出された時には僕の魂身に添はなかつた、それから車を雇つて此へ来る途中にもお登和さんに對して何と申譯をしゃう、もしやお登和さんが臺所に居て迎ひにでも出て來られては大變だと僕の心配は一通りで無かつたよ」小山「ウフ、お察し申す、丁度お登和さんが裏口から出る處へあの娘さんが向ふから來てお登和さんを見てウンと睨めたそうだし、あの娘さんは薄々お登和さんの事を知つて居ると見える子」大原「それがさ、僕の手紙を本家の人に見られて了つた、お登和さんの事を委しく書いて遣つたがそれを皆んなに讀まれたから愈よ疑ひが深い譯だ、嘸お登和さんが怒つて居るだらう、假令ひ此方の事が治まつてもお登和さんが再び僕の方へ心を向けまい子、全體最初からお登和さんの心は僕に向かなかつたのだ、それを君達の御盡力で漸く話しが纏まつたから僕に取つては意外の僥倖と悦んで居たけれども斯んな事になつた以上は再びモ一取返しが出来まい、僕には到底お登和さんが授からんのか子」と元氣喪阻して言葉さへ沈み勝ち、小山も氣の毒で溜まらず「イヤ決して心配し給ふな、昨夜中川君が僕の家へ來たがお登和さんは非常に君の身を案じて君の迷惑にならん様と頻に心配して居たそうだ」大原「爾うかネー、有難いな、然し此方の相談が何うなるだらうか、父が今の證據を見せて本家の人達が承諾して呉れやうか」小山「外の人が承諾しても御當人の娘さんが承知しまい、その娘さんはモ一君の女房氣取になつて居るそうでないか、アハ、お目出度いとても申さうか子」大原「イヤハヤ」

## 第百 大阪行

本家の人々は昨夜泊りし旅店の座敷にて今しも婚禮の事の相談最中へ大原の父が證據の書類を携へて來り、頻に血族結婚の弊害を説きたれども此方の人々は先入主となりて更に理解せず、中にも本家の父怒氣を含み「今更和老が爾んな事を言ひ出して何うする、郷里に居る時此方の相談は極まつて居るでないか、何時婚禮させやう、何處で婚禮をさせやうと今其事を話して居るのだ、イヤモオ一もあるものか」と頭

ごなしに叱り付ける、満の母も亦頻に良人の心變りを責て意氣地無しと罵る、本人のお代は最早満の女房氣取にて澄したものの「あんな家では狭くつて仕様が無いワ」と勝手な我儘を言つて居る、大原の父は失望したれども小山に約せし言葉もあり、此儘には引き下がれずと、再び繰返して此の婚禮の不利を述ぶるに本家の母が幾分か心を動かしかけん我が良人を顧み「子一貴老、此方計り話しが極まつて居ても肝腎の満さんが不承知では無理に婚禮させると却てお代の為めになりますまい、満さんの氣が進まないのはまだお代の心をよく知らないからです、昔は幼馴染で仲好く遊んで居たが近頃暫く逢はないから満さんも外へ氣が移るのでせう、何にしる先づお代の氣心をよく満さんに知らせて満さんもお代で無ければならんと云ふ様になつたところで其時婚禮させても遅い事はありません、今無理に押付けると屹度跡で面倒が起りますよ、爾うすると却てお代が苦勞計りして可哀想です」と我子を思ふの心より押付婚禮の不利なるを説く、大原の父はせめてもの味方なり「ホントに爾うです、氣の進まん時に婚禮させてもしや満が家を外にする様な事でもあるとお代さんに氣の毒です」と一日なりとも延ばし度し、本家の父妻を顧りみ「それでは何うすれば可い」妻「ですから子、私の考は斯うしやうと思ふのです、全體婚禮を濟ませてから大原の博覽會見物に出かける積りでしたがる寧ろ今のお代一人を満さんの處へ殘して皆んなで大阪へ出かけませう、お代が暫く満さんと一緒に居て見たら其心も満さんに分つて今のように嫌はれまいから其時になつて婚禮させるのです、急に爾うなれば私達も早く大阪から歸るし、遅くなる様なら九州や四國まで見物して歩いて可いではありませんか」と時に取つての新案なり、大原の父はお代を殘されん事の我子の迷惑と知りながら婚禮を強ゐらるゝより優しならめと「それも可いでせう」と同意する、本家の父も思ひ返す所あり「それでは斯うしやう、お代一人を殘すのも淋しいだろうから郷里へ電報をかけてお代の氣に入つた下女を一人呼寄せやう、満の家に居る婆さんも臨時雇だそうでお負けに月給が二圓だと云ふ、郷里の下女を使へば年に五六圓で澤山だ、あの婆さんを癆めさせて誰を呼ばうか、鍋が宜からう、鍋を呼んでお代に附けて置かう、其内にはお代の荷物も着くし、お代だつて餘所の家に居る様な氣もしまいから」と評議は此に一決しぬ、お代は大悦び「阿父さん、大阪へ行つたらお土産を澤山買つて来てお呉れ、私

の分と満さんの分と」「満の母其心根を感じ」「でもあゝ云ふ處が可愛いではないか」